

アイデンティティと協働性：空間と言語がつくる境目と境界線の身体化

小林 聡子

Identity and Collaborativity: Embodiment of a border and a boundary space and language reshape

Satoko Kobayashi

要旨

本稿では、筆者の所属大学を例にとり、交換留学生や正規生が言語と空間を介してどのように大学キャンパスにおける民族や国に関わる境目や境界を捉え、自分や他者のアイデンティティの交渉をしているのかを、ケーススタディを用いて考察する。分析対象は、留学生と正規生が協働学習をする教養展開科目ジャパニーズ・スタディーズの中で、筆者が担当をした 2014 年度から 2016 年度にかけて収集したデータで、メンタルマップ (Tuan 1975) を中心に、コメントペーパー、授業内外の課題、教員の授業ノート、フォローアップインタビューを含む。この分析から、制度的、空間的設計の影響に着目しつつ、多様な学生や教員が互いの境界を交渉しながら超え、曖昧にしながら協働性を育むような教育環境がどのように築いていけるのか、その手がかりを検討していく。

Abstract

This paper examines how a border and a boundary between regular students and international exchange students are negotiated and reshaped through their spatial and linguistic practice of identifying “us” and “Others.” I analyze 2014-17 data, including students' mental maps (Tuan 1975), reflection papers, in-class assignments, my class notes and follow-up interviews, from a few of my Liberal Arts courses in the English language called Japanese Studies, where international and regular students learn collaboratively. I hope this small case study at the affiliated university, where numbers of international students are expected to rise over the next few years, reveals some of the possible challenges for the realization of collaborative learning environment among diverse students and for the empowerment of each student.

はじめに

「外国人」「女性」「留学生」「教員」「若手」「研究者」「専任」「障がい者」「英語学習者」—大学教育の日常で触れる社会的アイデンティティのカテゴリーは多種多様である。特に、近年文部科学省が推し進めている大学のグローバル化事業（「グローバル30」「グローバル人材育成推進事業」「スーパーグローバル大学等事業」など）の流れの中で、「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」（ⁱグローバル人材育成推進会議「中間まとめ」より）がグローバル人材の柱の一つとされたり、「外国人留学生」やⁱⁱ「外国人及び外国の大学で学位を取得した専任教員等の割合」の増加が大学のグローバル化の成果指標に挙げられたりと、民族や国境に関するアイデンティティのカテゴリーが、政策段階で強調されていることがわかる。では、大学のキャンパスでは「日本人」や「外国人留学生」といったアイデンティティの交差や、カテゴリー化がどのように起こっているのだろうか。本稿では、筆者の所属大学を例にとり、交換留学生やⁱⁱⁱ正規生が言語と空間を介してどのように大学キャンパスにおける民族や国に関わる境目や境界を捉え、自分や他者のアイデンティティの交渉をしているのかを考察する。また、どのような制度的、空間的設計の影響を受けるのかに着目し、多様な学生や教員が「対等を志向し」（^{iv}吉野 2016）」、ただ互いの境界を強化するのではなく、それを交渉しながら超え、曖昧にしながら協働性を育むような教育環境がどのように築いていけるのか、その手がかりを検討していく。

言語と空間とアイデンティティ

アイデンティティは人々が生まれ持っているものでも、規定されているものでもなく、流動的に変容する社会的構成概念である（Hall 1997; Waters 1990 等）。アイデンティティ研究は多岐に渡るが、言語学分野では「語る」という実践的行為であれ、「ラベル」のような象徴的価値であれ、アイデンティティ交渉における言語の役割の重要性はこれまでに多く論じられてきた（Heller 1987 等）。Penelope Eckert と Sally McConnell-Ginet (1995) ^vらによると、カテゴリー化を通して自分や他者が何に所属するのかを交渉し、言語を用いることで、ある集団の属性や活動、また社会的な慣習への参加を規定したり、規制したり、ある意味で「取り締まる」ことができるという点で、言語とは自分や他者を分類する主要な道具であるといえる。また、教育の場を分析する多くの社会言語学者らも、アイデンティティとは言語を介して構築され、交渉され、また、維持されていると論じている（Bloome, Carter, Christian, Otto & Shuart-Faris 2005; Castanheira, Green, Dixon & Yeager 2008 等）。一方、空間とは、物理的、想像的あるいはバーチャルに構成されているかもしれないが、アイデンティティ構築の文脈になることから、コミュニティや集団意識の構成に影響するとされている。地理学や人類学分野では、人がどのように物理的な空間を自分の居場所として構築するのか、あるいは特定の場所に対する思い（例えば日系人が想像する日本）とアイデンティティ形成の関連を論じた研究が多々ある（Delaney 2002 等）。中でも、

言語や空間、また身体と行為の関連に着目したアイデンティティ研究は、言語学、社会学、人類学、地理学、^{vi}障害学など多分野にわたるが、そこで重要な理論的素地を提供しているのが、フェミニスト研究者の Judith Butler がジェンダーアイデンティティに関して提示した「パフォーマティビティ」の概念である。

ジェンダーパフォーマティビティの理論は、我々が行動を起こす機会をもつ以前に規範が我々を制約しており、我々が行動する時には、我々を制約する規範を反覆する。その反覆の手法は、新しいことも、予想外なこともあるかもしれないが、我々に先立ち、我々を超えたところにある規範との関連の中にあるに過ぎない。つまり、規範が我々を制約し、我々に働きかけ、この働きかけが我々の行為自体に影響するのである。（^{vii}Butler 2004, p. xi）

このパフォーマティビティの概念を用いて主体のアイデンティティと行為の関係性のプロセスを抽象的に捉えるだけでなく、特に批判的地理学の分野においては時間や空間といった具体的な構造と主体の関連を議論する重要性も論じられている（e.g. Nelson 1999; Gregson & Rose 2000）。その上で、パフォーマティビティの概念を言語や空間の行為に応用すると、人種、民族、ジェンダーや階級などの社会構造を日々の言語や空間を使った行動を通して身体化させ、再生産していると同時に、これらの行動によって、特定の Kategorie や空間が社会的特徴を持つものとして再構築されると考えられる（Thomas 2005）。

他者化による周縁化

留学生や移民、帰国生を含む言語的文化的少数派生徒の民族アイデンティティに関し、これまでも多くの研究がある。Mary Waters（1990）や Richard Alba（1990）らが論じるように、社会的多数派の民族アイデンティティが象徴的で選択的なものであるのに対し、少数派のアイデンティティは避けられるものではなく、本人の意思に関わらず付与されてしまう場合が多い。また、David Gillborn（2010）は、欧米における多数派の自己認識に関して「白人性（whiteness）」に触れ、「大多数の人が、それが当然だと思っているほど、『白人』に特権を与える前提や実践が文化に深く根付いている（p.2）」と論じている。「白人性において最も強力な危険な側面というのは、多くの（大多数の）白人が、自分が白人性の中心で不公正の維持をし、実践しているという認識はもとより、構造としての白人性の存在にすら気がついていないということだ（^{viii}Gillborn 2005, p.490）」という。この白人性の課題は、一つの国だけでなく、グローバル社会においても当然見られる課題であり、日本でも「白人性」については同様の傾向が見られる。同時に、人種、民族、言語、国籍、文化などの観念が合わさったものと捉えられることができる「日本人」（Yamashiro, 2013）の「日本人性」、つまり日本において社会的マジョリティである「日本人」を考える際にも、白人性という概念のアプローチに重なる部分がある（佐藤 2005）。つまり、自分たちを透明で、当たり前で、普通であると思い、それ自体も意識しておらず、それが

「その他の人々」を他者化し、周縁化させ、マイノリティ化させていることに気がついてすらいない状況を示すといえる (Gaitanidis & Shao-Kobayashi 2016)。国籍や民族、また大学の身分上の善でも悪でもない「境目 (border)」が、どのように超えがたい「境界 (boundary)」となっているのか、対等を志向する上で多角的に検討していく必要がある。

上記を踏まえ、本稿では多様な学生がどのような言語や空間を介した日常の相互作用によるアイデンティティ交渉をしているのか、その理解を深める手がかりとして、筆者の担当する英語によるリベラルアーツ科目を受講する交換留学生の観点を中心に明らかにし、今後の研究や教育実践に向けての課題設定をする。特に、言語や空間により生じる境目がどう認識され、境界を構築しているのか、また、どういった制度的、空間的設計の影響が考えられるのかを検討していく。その上で、多様な学生や教員が対等を目指し協働し、それが反覆により内在化し、当然となり、規範化していく、つまり「協働性 (Collaborativity)」を育む教育環境をどう再構成することができるのかを考察していく。

メンタルマップと語りから見る学生の捉える境目と境界

筆者が所属する国際教育センターでは、2000年度から従来の留学生向け科目を日本育ちの一般学部学生（以後「正規生」）が主に日本語を用いて対話する協働学習の方法を検討してきた（内海・見城・吉野・和田 2002、和田 2007、吉野・西住・和田 2013）。それを踏まえ、2013年度以降は、グローバル人材育成事業の一環として新たに英語で協働学習を実施するジャパニーズ・スタディーズが始まり、筆者はその開発と実践を担当してきた（担当授業名：「アイデンティティ形成と学び」「人種：日本人とアメリカ社会」「学校教育と公正性」「アメリカ映画における日本」「バイリンガリズムと言語学習」等）。

ジャパニーズ・スタディーズは、「日本」という事例を通して、「世界」を学ぶ、また「世界」を通して「日本」を学ぶという目的を持った科目である。日本についての基礎知識を学ぶだけでなく、自らの体験、自らの文化と照らし合わせて日本を見つめ直すことによって、様々な事象についての新しい視点、より深い気づきを得られることを目指している。（千葉大学普遍教育科目ジャパニーズ・スタディーズ科目群概要より）

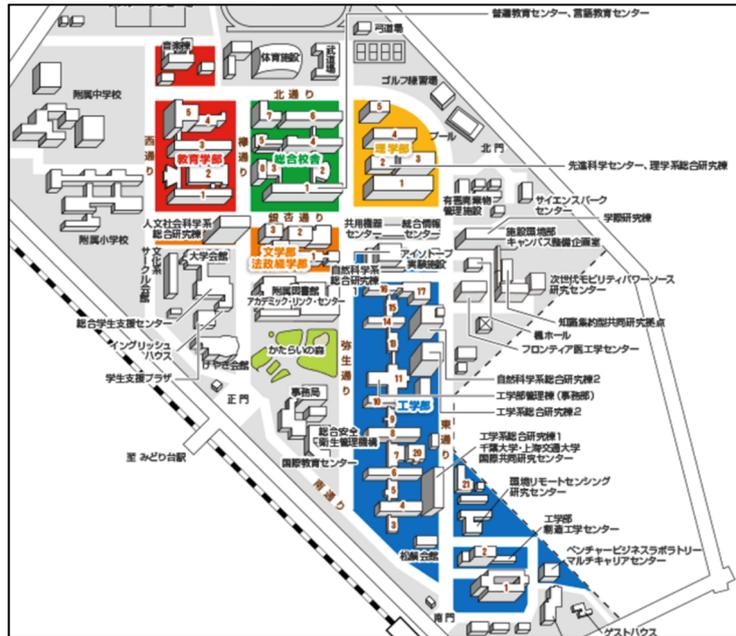
交換留学生の多くは英語圏以外から来ているものの、ジャパニーズ・スタディーズが英語ないし日英二言語使用のリベラルアーツ科目という特性から、英語がある程度堪能な留学生を受講しているという状況を記しておきたい。また、受講に関して英語や日本語の語学テストの点数に関わる規定は設けていないことから、留学生も正規生も様々な語学力が存在する。この授業実践について、2014～2015年度に行った挑戦的萌芽研究「参加者の言語的文化的多様性を前提とした共同授業に関する縦断的研究」では、①参加者の認知的変

容、②参加者間の関係構築、③教員による場の構築という3つの点に着目した研究を行ってきた（ガイタニディス・小林・西住・和田・吉野 2016 等）。

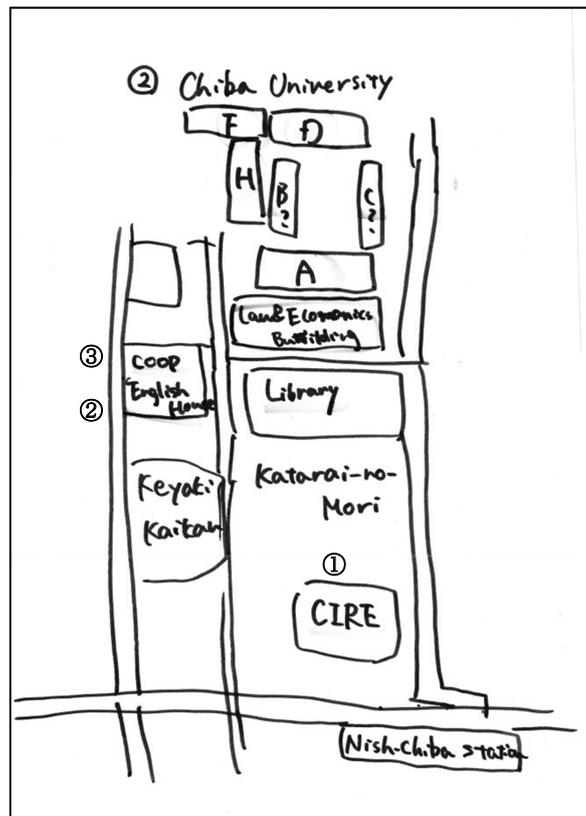
本稿では、2014 年から 2016 年にかけて収集した授業データ（授業資料、講義スライド、学生が提出した課題、メンタルマップ、振り返りコメント、フォローアップインタビュー等）のうち、特に言語と空間の行為に関連したものに焦点を当てる。中でも、社会的アイデンティティの研究で、研究対象者らの想像するコミュニティや社会関係を可視化する媒体としてよく使われるメンタルマップを導入し（Bucholtz 2010; Olsen 2008 等）、活動エリアを共有する人々がどのようにそれを観念化しているのかを理解する目的で用いた。地理学の見地から¹Yi-Fu Tuan（1975）は、メンタルマップは空間における行動自体を示すわけではないが、ある意味記憶装置であり、身体的行動の確実性を促すような観念的实践であり、一般的な地図のようにデータを整理する手法であり、日常的な習慣の見直しにつながるような想像の世界を示すという点での役割を果たす可能性を示唆している。上述の筆者が担当する教育や民族に関わる授業では、メンタルマップを学習媒体として活用しており、各授業内での使用目的は当然異なるものの、描く際の指示は「大学における自分のコミュニティのマップを描いてください」としてある。何がメンタルマップに描かれているかには授業内容や文脈が影響することは加味しつつ、これらをキャンパスの構成や学生らの語りと比較分析していく。そこから、どのように学生らが大学のキャンパスの日常で、民族や国に関するアイデンティティの交差や、カテゴリー化による境目や境界を経験しているのかを明らかにする手がかりとする。

「境界」の可視化：2014 年度の事例から

以下の分析では、2014 年春学期に開講した^{ix}「アイデンティティ形成と学び」という授業と、同時期に開講された^x「人種：日本人とアメリカ社会」で学生が描いたメンタルマップと、授業内の対話やコメントペーパーにおける学生の語りを見ていく。両クラスとも、学年と専門の異なる交換留学生と正規生が受講していた。アイデンティティの授業では、留学生が米国から 2 名、フィンランドから 3 名に加え、正規生が 3 名おり、人種の授業では、留学生が米国から 3 名、ドイツから 2 名、正規生 5 名が受講していた。以下の図 1 は、大学が公開している^{xi}キャンパスマップであり、図 2 と図 3 は人種の授業を受講していた日本育ちの正規生 W（図 2）とドイツからの留学生 D（図 3）が描いたメンタルマップである。

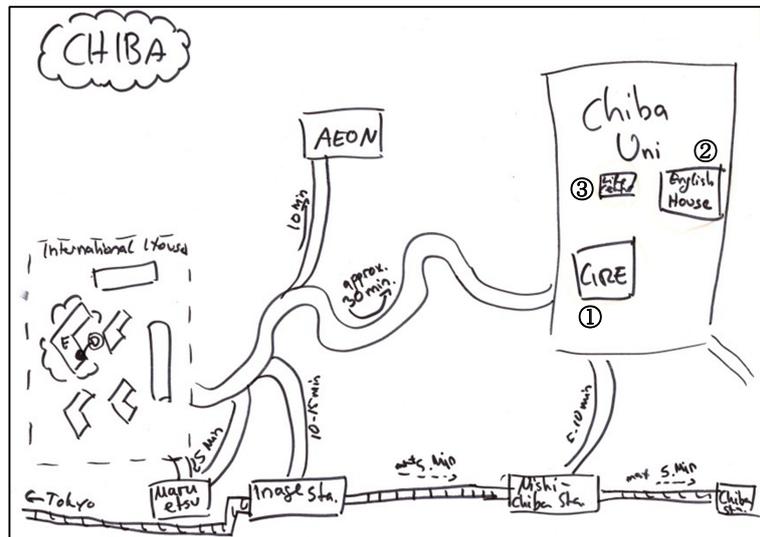


<図1: 大学のキャンパスマップ>



<図2: 正規生 W のメンタルマップ>

まず、図2は法学部2年生のWのマップであるが、例えば、W自身も「？」と記しているように、B棟とC棟近辺は普段Wの授業のない付近であるため、実際の配置と異なっている。しかし、図1と比べると、A、D、F、Hの各建物や、法政経学部棟である「Law & Economics Building」、「Library（図書館）」、「COOP（生協店舗）」、シンポジウム等が開かれる大ホールのある建物「Keyaki Kaikan」、「Katarai-no-Mori かたらいの森」と呼ばれる広場、「English House」、また、国際教育センター「CIRE（Center for International Research and Education）」など、キャンパス構内の中央部の情報が描かれている。English Houseとは英語を話すことがルールとなっており、TOIEC対策や個別英会話指導をする場所で、カフェとなっていることもあり留学生や英語学習者らが集う。また国際教育センターは、本授業を含むジャパニーズ・スタディーズなどの教室があり、留学生活上の手続きを行ったり、留学生らが日本語の授業を受けたりするセンターである。文学部3年生のYは、図2でMの描くF、D、H棟などは含まなかったものの、工学部棟を描くなどをしており、「自分はノマド（nomad 遊牧民）で、特定の場所にはいないことが多い。他学部の学生と一緒にいることもあるし、『かたらい（かたらいの森）』で何かイベントがやっていたらそこに参加したり、学部の友達といることもあるし、サークル活動に参加することもある。自分で面白そうだと思ったところにふらっと行く。（アイデンティティ授業内でのマップ説明 2014年6月10日）」と述べている。このように、正規生のマップにはかなりの多様性があり、学年や学部が異なること、サークル活動の有無など、様々な要因から詳細に描かれる箇所が異なっていた。

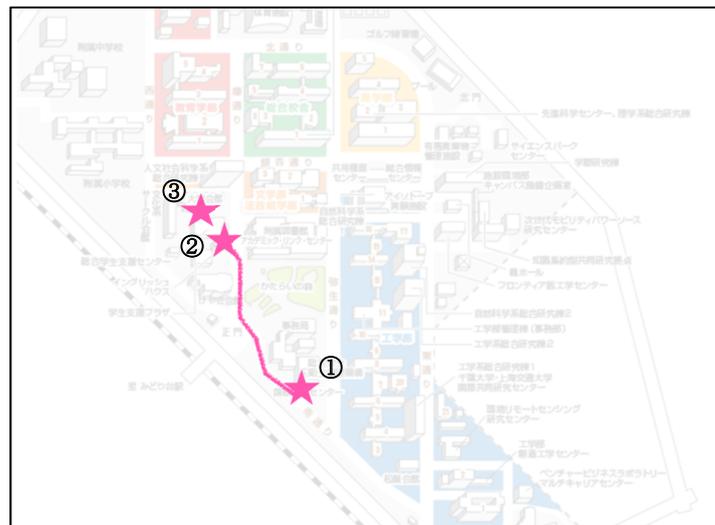


<図3：留学生Dのメンタルマップ>

一方で、留学生のメンタルマップも自分の日々の生活で足を運ぶところ、関連がある場所が描かれており、それ以外はマップから抜け落ちている。図3の留学生Dのマップであ

るが、下部には線路が描かれ、左側に留学生寮の敷地内における自分の部屋の位置を示し、そこからスーパーマーケットや駅、そして大学キャンパスまでの道のりが記されている。注目すべきは、右上に描いたキャンパス構内の3つのアイテム①「CIRE」、②「English House」、③「Life Center (=COOP)」である。正規生のものと比べると、ほとんどの留学生のマップにはキャンパス構内の情報が格段と少ない。少しずつ観点やアイテムの微妙な違いはあるものの、共通して描かれていたものは限定されており、①と②に関しては留学生10名全員が入れており、それしか描いていない学生も見られた。これについて、アメリカからの留学生 N は以下のようにコメントを記している。「留学生と他学部の学生が互いに出会うような機会が少ない。それに、留学生が関係するような場所がキャンパス内にほとんどなく、CIRE と English House 位だ。(アイデンティティ授業のコメントペーパー 2014年6月10日)」また、フィンランドからの留学生 H は、「(ある学部の棟が彼女のマップに描かれていることに言及して) 毎日自分の専門の学部棟の前を歩いてキャンパスを出るから。学部で授業を取りたかったけど、日本語が不足していてその学部での受講は無理だとのことで、結局一度しか入ったことはないけど。…日本語以外で情報発信がなされることがあまりないから、大学で何が起きているのかほとんどわからない。(アイデンティティ授業のコメントペーパー 2014年6月10日)」と述べている。

正規生と留学生のマップを重ね合わせると、共通点、つまり交差が起きている場所は①CIRE、②English House、③COOP に限られていることがわかった。つまり、留学生間の共通点が、正規生との共通箇所であるということである。下記の図 4 は、大学のキャンパスマップに留学生の行く場所を重ねたものである。



＜図 4：キャンパスマップと 2014 年の留学生のメンタルマップの重なり＞

ここからも明らかなように、②English House と③COOP は同じ建物内にあり、留学生の移動範囲はキャンパス全体でも入り口付近のみとかなり限られていることが見て取れる。

つまり、この導線上とその建物内が留学生と正規生とが交わる可能性のあるところといえる。米国からの留学生 N は、「千葉大学では、自分が留学生であり、その他なのだと感じる。もっと自分が千葉大学の一部だと感じるには、もっといろいろな人たちと関わることができる自分の居場所があるといい。（アイデンティティ授業の最終振り返りペーパー 2014 年 7 月 31 日）」と述べている。このように自分たちが「留学生」であり「その他」とであるとカテゴリー化し、千葉大学においてはあくまでも周縁的な存在であると解釈していることがわかる。では、「留学生」「正規生」という境目をどのように交差させ、曖昧にしていくことができるのだろうか。

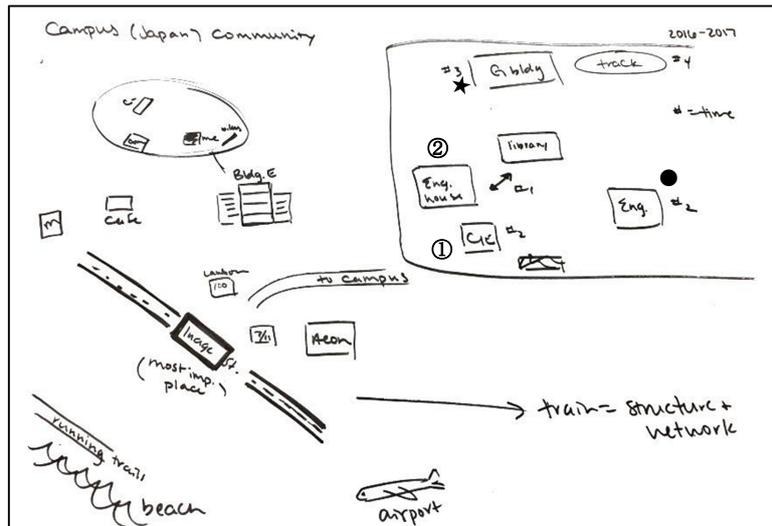
環境的課題と作為的变化：2016 年度の事例から

筆者の米国における日本人高校生のアイデンティティに関する研究（2008）において、それぞれのグループが互いの行動についてほとんど知らないとの認識について、参加者の一人が「いない、なんかまず見かけない。固まってるところがどこかわかんないから。離れてる。もう世界が違います。（p.84）」と述べているが、それと同様に正規生である文学部 3 年生 Y によると、「同じ学部の人とか、CIRE とか English House は『なんか留学生のいる場所』位の認識で、自分と関係がないと思っている人が多いかも（アイデンティティの授業内でのマップの説明 2014 年 6 月 10 日）」と述べていた。Aaron Gurwitsch（1979）によれば、個人が感じる物理的距離と社会的距離によって、集団をどのように捉えるのかが異なる。個人が特定の集団に身体的あるいは心的に距離が近い場合にその集団の特徴などを細かく捉えているのに対し、遠い場合には集団に内在する差異などは単純化されてしまいがちだと論じている。またこの心的な距離は、普段行くことがない建物という物理的な関わりのなさにより強化され、さらに「我々」と「彼ら」という境界となっていく。

この物理的な距離であるが、建物の位置や広さなどからなるものだが、どのような理由でどこにいるのかというのは、様々な社会的理由の結果から作られている（Kobayashi 2008）。例えば、正規生が CIRE に足を運ぶ理由については、留学への興味から留学相談室に訪れるためか、科目内容及び留学生との協働学習への興味から選択科目のジャパニーズ・スタディーズを受講するため、というのが主である。同様に、English House では英会話や TOEIC などのテスト対策を教わることができるため、自発的に訪れている。一方、留学生にとっての CIRE についてだが、ジャパニーズ・スタディーズは選択ではあるものの、必修である日本語の授業も CIRE で開講されていることから、授業を取る場所が CIRE に限定されているといえる。その点、English House には友人に会いに行く、ゆっくりしに行くという理由が主であり、制度的な縛りという点では性格が異なる。

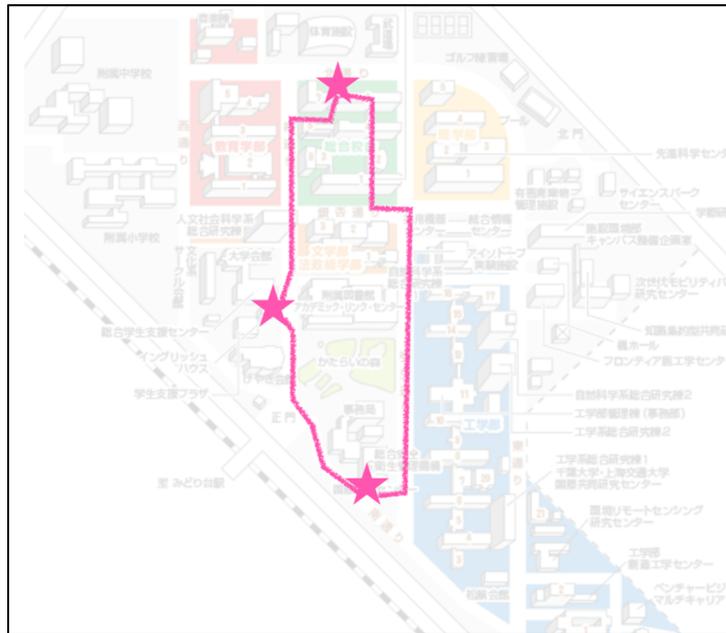
では、この制度的縛りを変化させたらどうなるか。留学生と日本人学生がもっと出会う機会を作るため、留学生はキャンパスの他の建物やスペースを使い、キャンパスで何が起きているのか情報共有をする必要がある。そこで、2016 年度より協働学習に関する共同

研究者らと相談の上、まずは試験的に筆者とガイタニデイスが担当するジャパニーズ・スタディーズの教室を他の棟に変更することで、留学生の行動範囲を恣意的に広げる試みを始めた。その結果、当然のことながら少なくとも筆者が担当する授業を受講する留学生のメンタルマップには、昨年度までは描かれていなかった「G号館」が描かれるようになった。



<図5：留学生Mのメンタルマップ>

上の図5は、2016年度^{xii}秋学期前半に開講した「人種：日本人とアメリカ社会」で米国からの留学生であり、工学部所属のMが描いたメンタルマップである。図3で2014年度のドイツからの留学生Dが描いたものと、線路、寮の配置などの記述されたアイテムや俯瞰的視点に類似点があることも興味深い。一方、右上のキャンパスについてであるが、Mが最も多く時間を過ごす、自分と関係があると理解している場所は、「# = time (過ごす時間の長さの順位)」で示してある。それによると、②の「English House」ないし「Library」の双方の行き来に「#1」と描かれていることから、その二つの場所で過ごすことが多いというのがわかる。また、英語で専門の授業を受けている工学部棟「●」、そして日本語の授業を受講している③の国際教育センター「^{xiii}CIE」が、本人の感覚としては同一程度の時間を過ごしていると理解していることが、「#2」のマークから見て取れる。2014年度のマップで留学生と正規生共に顕著であった③「COOP/Life Center」は記載していないものの、「★」で示した「G bldg (G号館)」が「#3」、そしてMが趣味でジョギングをすることから、「Track (運動場)」も「#4」として描写されている。つまり、大半の交換留学生は学部での授業がないことや、図書館や運動場の利用に個人差があることを指し引いたとしても、留学生らのキャンパス内の行動範囲が図6のような可能性がわかる。



<図6：キャンパスマップと2016年の留学生のメンタルマップの重なり>

個々の学生の通路選択は多様にあるだろうが、これまで大学の入り口付近で完結していた留学生らの行動範囲は、図6のラインの中に少なくとも広がったといえる。また、Mとのフォローアップインタビュー（2016年11月26日）によると、G棟でジャパニーズ・スタディーズの授業があることから授業前後にG棟内の自習室やラウンジを利用するようになったという。つまり、物理空間的にも周縁的だった留学生の行動範囲は、少なくとも大学構内の中央部周辺では当たり前になったということである。また、English Houseや国際教育センターは自分とは関係のない場所だと捉え、普段留学生と接することがない正規生にとっても、このような留学生の行動範囲の広がりにより、少なくとも大学構内の中心部に留学生がいる風景が日常になってくるといえるのではないだろうか。

ディスカッション

アイデンティティの構築には、様々なイデオロギーに影響を受けた複雑で多様なカテゴリー化のプロセスが絡んでいる。自己や他者が特定の人種や民族グループのメンバーであることを否定したり、認めたりするアイデンティティの（再）構築を通し、グループ間の境目が起こりそれが境界化した社会構造が想像され続け、再構築され、強化されていく（Hall 1997; Bauman 2004）。本稿の事例で出てきた留学生が自分たちを学内で「その他」と感じていたように、周縁化された少数派アイデンティティは自然と存在するものではなく、他者、特に多数派のメンバーだと信じられている人々との言語／非言語を介した相互作用によって構築される。例え直接的な関わりがなくとも（Pyke & Dang 2003）、あるいは

はないからこそ、留学生のような少数派アイデンティティは人種・民族という想像体による影響で、各々の差異はあるものの、「自分が異質であるという感覚であったり、異質なことが劣等であるというよそ者意識に対抗すべく、よそ者同士の相互協力が必要だと感じたりすることが、自分たちは拒絶されているという共通意識となる。(xiv Peshkin 1991, p. 25)」自己や他者を何者かと定義する時は、常に相互作用的に「それ以外の人」も同時に構築している(Hall 1997)。つまり、大学の事務手続き上で「正規生」と「留学生(非正規生)」をカテゴリー化することでシステム上の境目が作られるだけでなく、身分が「正規生」であれ「留学生」であれ、学生個々が自分や他者を「留学生」と言語を用いて認知的また実践的にカテゴリー化することで「それ以外」との境目を作る。また日々の生活の中で、カリキュラムや学生支援等の内容と建物の位置により行動範囲が規定されていき、自分や他者のテリトリーを認識し、身体化していく。このような言語や空間を用いたアイデンティティの構築を通して、前章で「白人性」という概念を用いて説明した「日本人性」やグループ間の境界という社会的関係が再生され、維持され、強化されていく(Hall 1997; Bauman 2004)。それゆえに、この境界を曖昧にし、協働性を培っていくための一歩として、本論に示した一例のように行動範囲の作為的な変化などを仕掛けていく必要があるのではないだろうか。

結論

近年、グローバル化という言葉とともに、協働という概念も注目されているが、単に留学生や海外へ派遣する学生の数を一方向的に増やすのではなく、どのように相互に学び合う機会をもてるのが課題となっている。留学生と正規生の行動範囲を交差させることや、共同型授業を増やすことは、協働に向けての重要な一歩である。しかしながら、同じ場所においても多角的・批判的・自己省察的観点から協働に取り組む姿勢と、実際に協働が起こる仕掛けを作らなければ、互いを分かち境目が強化され、境界が認識されるだけという可能性も高い。教育学部2年のEは、上記の多角的・批判的・自己省察的観点に基づいて実施されている協働学習科目ジャパニーズ・スタディーズについて、以下のように述べている。「ジャパニーズ・スタディーズでは、いろいろな学部や国から学生が集まっており、この科目の授業に参加するときには、自分が『日本人』という意識よりも『教育学部』という認識を強く感じる。多分、授業内容について、専門が違う学生が色々な観点から興味深い意見を出すからではないかと思う。(アイデンティティ授業の写真プロジェクト 2014年6月21日)」国籍、人種、民族、専門、学年、ジェンダー、能力など、相互行為の中で差異が起こることは当然である。その差異が境界を作るのではなく、当たり前前に日常の風景に溶け込み合う、その状況でこそ協働性が育まれるのではないだろうか。

本稿では、言語と空間を介したアイデンティティ交渉が、どのように制度的、空間的設計の影響を受けるのかに着目した。今後、交換留学生だけではなく、正規生である留学生、日本育ちの外国籍学生、外国育ちの日本国籍学生等を含めて調査をし、多様化が進む教育

環境を整備する際、生徒たちが肯定的なアイデンティティや関係性を築くためにどのようなカリキュラムあるいは教室空間を作ればいいのか、その教育計画や教育環境整備における実践的な示唆へと繋げていきたい。

引用文献

- ガイタニディスヤニス・小林聡子・西住奏子・和田健・吉野文 (2016) 「『日本』を題材とした協働学習の仕掛け—教養教育における実践から考える—」『国際教育』第9号、pp.1-73
- 佐藤郡衛 (2005) 「海外子女教育にみる「日本人性」の問題とその再考—トランスナショナルな海外子女教育の可能性—」(佐藤郡衛・吉谷武志編)『ひとを分けるものつなぐもの—異文化間教育からの挑戦状』(ナカニシヤ出版)
- 吉野文・西住奏子・和田健 (2013) 「共同教育における「座談」の展開：知の枠組みを問い直す大学授業」『国際教育』6、pp.1-27、千葉大学国際教育センター
- Barth, F. (Ed.). ([1967] 1998). *Ethnic Groups and Boundaries: The social organization of culture difference*. Long Grove, Illinois: Waveland Press, Inc.
- Bloome, D., Carter, S. P., Christian, B. M., Otto, S., & Shuart-Faris, N. (2005). *Discourse analysis and the study of classroom language and literacy events: microethnographic perspective*. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Bucholtz, M. (2010). *White kids: Language, race, and styles of youth identity*. Cambridge University Press.
- Butler, J. (2009). *Performativity, precarity and sexual politics*. AIBR-Revista de Antropologia Iberoamericana, 4(3), 321.
- Delaney, D. (2002). *The Space That Race Makes*. *The Professional Geographer*, 54(1), 6-14.
- Castanheira, M. L., Green, J., Dixon, C., & Yeager, B. (2008). *(Re)Formulating Identities In The Face Of Fluid Modernity: An interactional ethnographic approach*. *International Journal of Educational Research*.
- Eckert, P., & McConnell-Ginet, S. (1995). *Constructing Meaning, Constructing Selves: Snapshots of language, gender, and class from Belten high*. In M. Bucholtz & K. Hall (Eds.), *Gender articulated: Language and the socially constructed self* (pp. 469-507). New York: Routledge.
- Gaitanidis, I. & Shao-Kobayashi, S. (2016). *De-Racializing Japaneseness: A Collaborative Approach to Shifting Interpretation and Representation of “Culture” at a University in Japan*. in *Race, Equity, and the Learning Environment: The Global Relevance of Critical and Inclusive Pedagogies in Higher Education*. F. Tuitt, C. Haynes, & S. Stewart (Eds.). Stylus Publishing, LLC.
- Gillborn, D. 2005. “Education Policy as an Act of White Supremacy: Whiteness, Critical Race Theory and Education Reform.” *Journal of Education Policy* 20 (4): 485–505.

- 2010. "The White Working Class, Racism and Respectability: Victims, Degenerates and Interest-convergence." *Journal of Educational Studies* 58 (1): 3–25.
- Gregson, N., & Rose, G. (2000). Taking Butler Elsewhere: Performativities, spatialities and subjectivities. *Environment and Planning*, 18, 433-452
- Gurwitsch, A. (1979). *Studies in Phenomenology and Psychology*. Evanston: Northwestern University Press.
- Hall, S. (1997). Old and New Identities, Old and New Ethnicities. In A. D. King (Ed.), *Culture and Globalization and the World-system: Contemporary conditions for the representation of identity* (pp. 41-68). Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Kobayashi, S. (2008). Labeling groups and space: Discourse and spatial positioning of social identity among transnational Japanese high school students. ProQuest.
- Olsen, L. (1997). Made in America: Immigrant students in our public schools. The New Press, 450
- Nelson, L. (1999). Bodies (and spaces) do matter: the limits of performativity. *Gender, Place and Culture: A Journal of Feminist Geography*, 6(4), 331-353.
- Thomas, M. E. (2005). 'I think it's just natural': The spatiality of racial segregation at a US high school. *Environment and Planning*, 37, 1233-1248.
- Tuan, Y. F. (1975). Images and mental maps. *Annals of the Association of American Geographers*, 65(2), 205-212.
- Yamashiro, J. H. (2013). The social construction of race and minorities in Japan. *Sociology Compass*, 7(2), 147–161.
- Waters, M. (1990). *Ethnic Options: Choosing identities in America*. Berkeley: University of California Press.

ⁱ 経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援 「制度概要」 <http://www.jsps.go.jp/j-gjinzai/gaiyou.html>

ⁱⁱ スーパーグローバル大学創成支援概要図

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/_icsFiles/afiedfile/2016/09/08/1360288_03.pdf

iii ここでいう「正規生」とは、入試などを経て学位を取るために入学してきた学生のことである。「日本人学生」と総称されることもあるが、国籍やアイデンティティなど、これらの学生が必ずしも「日本人」とは限らないことから、ここでは大学における身分を用いる。一方、「正規」は「非正規」と対となるというカテゴリーであり、交換留学生ら特別聴講生は通常「非正規生」とされる。ただ、留学生も「正規に留学してきた非正規生」なのであり、この「正規」「非正規」という二項対立概念の政治性を本稿で問っている。このようなカテゴリーの政治性は、それを論じる本稿自体の課題でもあることを理解した上で、本文で正規生と留学生というカテゴリーを用いている。

iv 吉野文 (2016) 科研費申請書「学生の言語的文化的多様性を前提とした教養教育：協働学習の可視化と理論化」

v “[I]anguage is a primary tool people use in constituting themselves and others as ‘kinds’ of people in terms of which attributes, activities, and participation in social practice can be regulated” (p. 470). Eckert, P., & McConnell-Ginet, S. (1995).

vi フェミニスト障害学と呼ばれる分野。Wendell, S. (1996). *The rejected body: Feminist philosophical reflections on disability*. Psychology Press.等 参照

vii Butler, J. (2009). “The theory of gender performativity presupposes that norms are acting on us before we have a chance to act at all, and that when we do act, we recapitulate the norms that act upon us, perhaps in new or unexpected ways, but still in relation to norms that precede us and exceed us. In other words, norms act on us, work upon us, and this kind of ‘being worked on’ makes its way into our own action.” (xi)

viii Gillborn, D. 2005. “One of the most powerful and dangerous aspects of whiteness is that many (possibly the majority) of white people have no awareness of whiteness as a construction, let alone their own role in sustaining and playing out the inequities at the heart of whiteness” (490).

ix 授業概要は以下である：「民族、人種、能力、階級、ジェンダーなどに関わる様々な『アイデンティティ』や『差異』がどのように学びの場で構築され、またそのアイデンティティがどのように学びの経験に影響を与えるのかを考える。特に、ディスカッションやグループプロジェクトを通し、移民などのマイノリティの視点から学生自らの経験や身の回りのケースを照らし合わせ、多様化する日本社会や学校におけるアイデンティティについて考察していく。（『アイデンティティ形成と学び』シラバスより）

^x授業概要は以下である：「『人種』とは一体何なのだろうか。米国は『人種のるつぼ』であると聞いたことがあるかもしれないが、日本人が人種について考えることは必要なのだろうか。本授業では、米国社会の歴史と現代の状況を例に、特に日系アメリカ人の経験から人種という概念を考察していく。そこから、日本における学生自らの経験や身の回りのケースを照らし合わせ、多様化する日本社会における人種について再考していく。講義、ディスカッション、グループプロジェクトを通じ、国際的な視野から『日本人』『アジア人』『人種』という概念を考える場となることを目指す。」

^{xi} http://www.chiba-u.ac.jp/campus_map/nishichiba/

^{xii} 2016年度よりターム制度が導入され、一年間を6つのタームに分けるようになった。そのため、ここで便宜上「秋学期前半」としたのは、大学のシステム上は第4タームに当たる。

^{xiii} 2016年度より英語名称が Center for International Education に改正されたため、CIE となった。

^{xiv} “a common sense of rejection, from a sense of being different, and needing to stand together in opposition to the notion of outsiders that what makes them different also makes them inferior”

